

近松門左衛門作

地誅鼓苦深うして鳥驚かず。刑鞭蒲朽ちて
 蟻空しく去るとは。今此の時よ秋津君。延
 喜の帝の御聖徳オロシフ申すもをさく。

有難し。地治まる國や民草の猶その榮え衰
 へを。直に御覽あるべしとて唐土の聖代の
 巡狩に準へ。交野のみ野の櫻狩今日の
 紅葉とをりはへて。月卿雲客供奉せしゆ
 フシはや警蹕と呼ぶなる。地御狩車の五
 つ緒も五つの常の道芝や。惠の露に轟きて
 御幸オクリあるこそフシ目出度けれ。禁野
 を過ぎて渚の院賤が門田の八束穂に。竈の
 煙ほのくくと戸ざさぬ御代の民百姓。管籥
 の聲羽施の美欣々然と悦びて。君が御狩を
 待ち頭に空飛ぶ鳥も御車に。群り慕ひ囀り
 しはけに賢王のいつくしみ。鳥獸にも通じ
 けんフシ民安全のしるしなり。同時に行く

手の松が根に幼き者の泣く聲す。藏人をも
 つて召さるれば未だ乳はなれぬ捨兒なり。
 主上御涙ぐませ給ひ。我國民を憐み育むと
 雖も。地子を捨つる邪険の者我が國にある
 事。朕が不徳の誤りと忝くも龍顔にスエテ御
 涙をぞかけ給ふ。地然る所へ十八九なる女
 房慌しく駆け來り。なう其の子遣させ給へ
 返し給へと泣き叫び。地全く捨子に候はず
 妾老母を持ち候が。今は老木のはも落ちて
 物まらせん様もなく。乳房を哺め養ひ候。
 地此の子が争ひむつかるゆる暫し外方にす
 かし置きて候。聊か捨ては致さぬなり。スエテ
 返してたべと泣き居たる。主上御手をはた
 と打ち。地扱は捨兒にてはなかりしな。子に
 かへて母をいたはる孝行賢女とも謂べし。
 して汝に夫はなきか。さん候夫は去年の秋

霧と地消えても残る面影の。形見は此の子
 とばかりの涙もいづれ由ありて。目許の位
 襟外れフシ育ちゆかしき女なり。地主上感
 じ思召し中納言希世を召され。地窮民を養
 ふは古への道。彼が老母諸共汝に預け與ふ
 る條。地大内に誘引しよく養ひいたは
 るべし。就いてはかゝる豊年の悦び天に訴
 ふるしるしぞや。初菊の宴を催し紫宸殿に
 て音楽を奏し。五穀豊饒を祝ふべしと。世
 に畏る御勅仰ぐも。おろか三重なりけ
 らし。フシ初霜よ。はつ霜に。折らばや折
 らん花の宴。スエテ菊見の御遊繡竹の。其の
 役々をフシ分たれし。地中にも當今第四の
 御子蟬丸の宮と申せしは。天性美男の御器
 量天皇御寵愛淺からず。琵琶の妙を得給へ
 り。扱又琴は蟬丸の北の御方と定めらる。
 そも此の姫君は右大辨早廣が妹にて。はや
 十八の秋風もふさがて通す振袖や。一二つ遠
 ひのつま琴はフシ似合ひ頃とのしらべかや。
 地月出でなば管絃を始むべしとの御沙汰に

て。衛士は烏帽子を傾けて。月待つ程の篝
火もオクリ優にフシへ目出度き景色なり。地蟬
丸は只一人月や出でしと欄干の。奥の渡敷
見給へば琴を枕に女の寢聲。ステテ斯くこそ
歌ひ出しけれ。歌夕べの。我が涙川。

若しや逢ふ瀬のなみ枕。それを頼みに憂き
身を送るゑ。此の年。月をゑ。地宮驚き御
覽あれば北の方にておはします。詞お側に
寄りてこれく。今宵の管絃晴がまし。琴
を枕の假寝は調子もや狂ひなん。誰かある
それくと宣へば。地ほつと答へて女房達
御枕参らする。北の御方つと寄り宮の御
太刀すばと抜き。御長杖引寄せ二つにすど
切り給へば。宮は驚き緋り付きこはそも如
何に狂氣かとステテ呆れ。果ててぞおはしけ
る。地北の方聞き給ひ。全く狂氣に候はず。
お主様と自らは夫婦となりて二歳の。幾
夜を重ね候へども。合はぬ縁かや但しはお
遂に一夜も肌ふれて枕か氣に入らざるか。
はせし事もなし。釋迦でもさうはならぬも

の。男持つたもフシ名ばかりぞ。地益もな
き長枕科はなけれど成敗とステテ怨み。わび
つゝ泣き給ふ。詞宮うなづかせ給ひ。ち、
怨みさもあらん言ひ出すべき折もなく今迄
は打過ぎし。親の命を背かれず夫婦とはな
りつれど。地我幼少より出家の望一生不犯
の願を立て。佛に誓言立てし故。是非なき
事と諦め給へと。フシ共に涙を流さる。地
北の御方涙を止め。詞ム、扱は左様に候か
然らば妾も出家を遂げ。此の世はわづか永
き世の心が誠の夫婦ぞや。地今より自らも
誓文立て互に心を恥しめて。身を汚さず清
淨に目出度く發心遂げ申さん。併し今宵は
誓文固め一世一度の色床は。佛もお氣の通
らめと膝に凭れて宣へばさすが。亂るゝ花
薄言葉に。露を慕はせて。篋中オクリへ深
く入り給ふ。フシ月かあらぬか。地あかねさ
す衛士は篝を焚きさして。ステテさめんと
ぞ泣き居たる。地蟬丸御覽じ。目出度き
御遊の折柄稀有の落涙心得難しと宣へば。

地烏帽子かなぐりこれ御覽せなう御見忘れ
候か。我は一歳春日の里にて假寝のお情候
ひし。直姫にて御座候ありしあふ瀬の川水
の。淀みく月重なり君の御子を生み参
らせ。不思議の事にて御父帝様に。老母諸
共拾はれ候へども。君の浮名を憚り。夫は
死せしと偽り。希世の卿にかしづかれ候が。
せめてお姿見まほしく衛士の男に出立ちし。
とても賤しき此の身にて添ひ奉るは叶はぬ
事。血判を染めて賜はりし誓紙も今はよし
なし事。只今焼き棄て奥様とはお仲よし野
の初櫻。火花もかをれとにほひ炭くべんとせ
しを引止め。明け暮れ忘るゝ疎もなく乳人
の清貴を尋ねに出し。出家の望と偽り妻の
側にも寝る夜なき。地我をば無下に此の誓
紙灰になせとは曲もなやと。卿ち給へば直
姫と袂に抱きつくば川。積る戀しさあふ時
は。心後れに胸騒ぐ。フシそろ顔ひの姿な
り。地爰に北の方の御兄右大辨早廣此の體を
きつと見て。詞今宵の衛士は蟬丸密通の女

なり。地あれ吟味せよ官人舍人我もノと
駈け出づる。聲に恐れて人々はフシ築地が
隈に逃げ給ふ。地早廣誓紙を拾ひ取り。
さあ證據は握つた奏聞せんとひしめけば。
人目も恥ぢず北の方なうはしたなし官の御
名の立つ事ぞ。機密にしてたべ兄上様ど涙
ぼくれて宜へば。地早廣眼に角を立て。エ
、言ひがひなし結構だても事による。官を
聲に持つてこそ一門親類榮華もあれ。兄が
鼻までひしぐるが夫を寝取られ口惜しうは
思はぬか。これ證據を見よと誓紙を出せば。
地北の方披見あり官の御手跡紛れなし。く
わつとせき立つ顔面に血筋は眞紅の網を張
り。髪逆に立ち上り。曠志の身慄ひ齒を
鳴らしエ、たらされし口惜しや。恨めしや
結ましや思ひ知らずや此の恨み。思ひ知ら
せん思ひ知れと。天地を睨む兩眼に血の涙
をはら。くくはら立やとすんくに喰
ひ裂き捨て。衛士の焚く火はものかはの胸
の煙はくるく。狂ひわな、き出で給

ふは恐ろしくも亦三重へ哀なりッシいでや
其の頃。地蟬丸の御乳人左衛門督清貫は。
直姫を尋ねんため南都を忍び巡りしが。一
先づ都に歸るさの長池より日は暮れて。物
凄じき宇治橋のフシ宮居にこそは着きにけ
れ。地今宵は是れにて明かさんと笠を取つ
て向を見れば。地怪しき姿南無三寶。此の
社は嫉妬を守る橋姫の。丑の時詣足なんめ
り。地窺ひ見ばやと神前のオクリ松の古木
に攀ち躡りッシ身をほそめたる。振舞は。
さながら梢にさゝがにの。蜘蛛の網に。
荒れたる駒は繋ぐとも。兩道かぐるおだ人
を。思ふはつらし思はぬも。ア、くくく
物うしのフシ時参り。仇と情と怨念と。
三つの鐵輪に燃ゆる火に。スエテ曠志の薪こ
りもなく。煙くらべん夕闇の小オクリ空も。
とろろに浮舟のけうとく立ちし宮柱。フシ
人になつつけのつま櫛も。おどろの髪を。七
つ八つ地夜半の鐘の物凄き。心にこもる願
事に。あまの逆手をうつて祈願へば。驗

あらなんぬら。くく恐ろしや心の角の
枝高き。かけるふの森ほのぐらし。ハツミあ
さくなあけそ。フシ朝日山。山吹の潮にかけ
見えて。峰の稻妻ちらくく。星の光か
ア、螢火か。あこがれ出づるフシわが魂か。
けにや外面似菩薩内心如夜叉。たとへ其の
色コハリ白くとも。無間の猛火に黒むべく。
涙に懸に紅の裾踏みしだき暗きより。女
心の倉橋山くらく。くく湧き返り。
玉散る川瀬ナホス。波の音。梢を渡る小夜嵐ど
う。く。さらくどうく。とんど
ろとどろと踏み鳴らし。世を宇治橋の橋姫
の。宮居をたき祈りしは。トル身の毛彌立
つ。ばかりなり。フシ清貫今が。地見始め何
とやら氣味悪く。枝に取付き見る所に。又
向より同じ姿の人影見ゆる。地ヤア是も丑
の時。地扱澤山や天狗の所爲か。但し狐や
魅しぬと。フシ瞳を濡らして居たりけり。
二人の女も見交して互にぞつとしたりしが。
地始の女小聲になり。ナウ和上藤は何人ぞ

とあればさいふ御身は何者ぞ。ヲ、御身に
かはらぬ妻なれば祈も同じ嫉妬よの。され
ば我も憎氣事扱も世の中に性の善き男はな
し。地扱々合うたり叶うたり。いざ立ちな
がら憎氣譎を始め。語りて憂さを。晴さん
と先づ傍に立寄れば。地清貫怖さも打忘れ
急な所の憎氣譎と。可笑しさどうも堪られ
ず。フシふつと吹き出すばかりなり。地扱も
妾は女院の上意芭蕉と申す者なるが。及ば
ぬ戀とは申し乍ら。幼き時より蟬丸様に思
ひをかけ。斯く口説き申せしかば一夜は
思ひを晴させんと堅き約束候へども。地奥
様政道強きにやお約束も夢となり。獨り焦
れ死なんより斯く祈り申すと。言ひもあへ
ぬに初の女我こそ宮の北の方。地妾を恨み
は假事ぞ。直姫といふいたづら女郎ゆゑ自
らも捨てられし。地憎くい奴は直姫とスエテ
牙を鳴らして語らるれば。清貫聞けば餘所
ならず。地肝をつぶして居たりしが。地芭
蕉手を拍ち扱奥様か知らでお恨み申したり。

地戀の敵は直姫一人いざ打殺し共に本意を遂
げ申さん。ヲ、尤と神木に立並び。鬼とも
蛇ともなし給へと肝臓碎き釘取出し。これ
は直姫が兩眼に打つ釘はや潰れよと丁ど打
ち。是首の骨胸板五體腐れとはたと打ち。
四十四本の釘の數筋骨節々々がひく。打
つて思ひを晴らせよと躍り上り飛び上り。
丁々はたたく。丁ど打てば。釘目より血流
れてさしもの大木揺ぐにぞ。清貫もゆら
くくとフシ漂ふ舟の如くなり。地餘りゆら
れて目眩き枝踏み外しどうど落つる。二人
は驚き飛んで逃ぐるを北の方の小腕取つて
立歸れば。其の隙に芭蕉の前。フシ行方も知
らず逃げ失せけり。地清貫今は堪られずこ
れ御臺様。向人にこそよればしたなき御振舞。
明けぬ先に。サア御歸りと申せども。地聞き
人れず人に知られて此の大願。空しかると
も一念は死して報を知らせんと。戀に浮名
や橘の小鳥が崎は大紅蓮。逆巻く水に飛び
入つて。フシあはれ果敢なく成り給ふ。清

貫あわて松明々々といふ聲に里人ども。地
松明提燈星の如く此處彼處とぞどよめきけ
る。地時に小波岸をたつきあら恐ろしや。
北の方の遠骸むつくと起き上り。角は忽ち
蛇身となり。鱗を振り煙を降らし波を蹴
立てて。三重へ巻き上り。地鳥居の笠木をく
るくくくろり。くくと引纏ひ。地虚空
に向つて吐く息はたゞ火の雨のフシ如くな
り。地人々是に怖ぢ恐れわつと言うて逃
げ散れば大蛇は川瀬に飛び入つて。地コハリ生
きかはり死にかはり世々生々に恨みをなさ
ん。あら怨めしや口惜しと。いふ聲ばかり
は水底のそこ。はかとなく流れ行く。宇治
の川霧絶えなく明け行く空と消えてんけ
り。恐ろしし。凄まじし。地もつとも果敢
なし哀れなりさて戀路は。切なる思ひぞや。

第一

ながらも、飢ゑす凍えぬ柴の庵明け暮れ殺生を樂しみ。尾花頼に弓取り添へ、フシ今日も狩場に出でにける。地深草山の萬原より鬼一疋追出し、弓矢取つて打番ひ弓手も、ちりに放つ矢を、手先下りに射損じて誰が刈り積みし稻村に。はぶくら込めてすばと立ち鬼は通れ失せにけり。弓矢八幡射損ぜし。いで矢を取らんと稻引き退くれば。こは如何に。■廿ばかりの殿上人二八餘りの上臈の。左の袂に矢を受けてスエテ涙にしをれおはします。■忠光はつと驚き知らぬ事は是非もなし。見奉ればけしうはあらぬ御有様怪しや語りおはしませ。ヲ、我は當今第四の宮蟬丸といふものよ。■これなる女は直姫とて踏みも習はぬ若草に。つまもこれもれり追風の追手も急に來るべし。萬事は頼むと宣ひてスエテ又御涙にむせ給ふ。■ハア扱は蟬丸の宮にてましますか。某は千手太郎忠光とて古へは掛鞍にも乗りし者。殊に某が妹は女院様のお末の奉公仕る。然れば大

内ゆかりと申し數ならぬ某を。かゝる高位の御頼み一命も惜しからず。父は千手入道とて年罷り寄つたれどもかひなくしき覺の者。■一先づ私宅へ御供申し仔細は靜かに承らん。いざさせ給へといふ所へ。■右大辨早廣兵仗三十三此處彼處と探し來り。あれこそ蟬丸直姫よ搦め取れと喚いてかゝる。忠光面に立塞がりこれくくく。扱方々は追手よな。宮の御誤はいさ知らず。某は千手太郎といふ者よ。苟も頼まれ參らせしとうく歸れと呼ははりける。早廣大きに怒り宮は不義の誤ゆる召捕れとの勅諭なるが。繪言にたてづくは扱はうぬめは朝敵かといへば。いやさ朝敵にもせよとん敵にもせよ。武士の一言繪言より重し。頼まゝるといふからは命は君に奉る。悪しく寄らば蹴殺さんと力足をどうど踏む。■早廣怒つて何の二才め討取れと。群りかゝるを飛びしさり矢束くつろけ矢つき早さし取り引結め仇矢もなく雨の如くに三重へ射

かくれば。■早廣も敵はじと皆ちりくくに落失せけり。■■さもさうす是迄と。■直姫を肩にかけ。宮の御手を引き參らせ己が。宿所に三重へ歸りけるフシ既に其の日も。■暮過ぎて左衛門督清貫は。蟬丸落失せ給ふと聞き京近邊を尋ね廻り。木幡の里に着きけるが草鞋切れて行き暮れし。村雨しきる今宵しも官ましますとも知らばこそ。千手が門の茅葺にフシ暗間を渡ぎ立たれけり。■雨にこもれる夜半の鐘霧の絶間をすかし見れば。■女姿の振袖もいと恐びたる氣色なり。木蔭に立退き見給へば。彼の女門の扉を忙しげに物申さんとぞ叩きける。千手親子はすは追手よと駈け出で。夜中の案内何者といふ。なうさ宣ふは兄上か父上か芭蕉の前にて候が。■朋輩の讒に逢ひ御前を紛れ出で候。爰明け給へといふ聲に母は驚き。扱は我が子かなつかしやと明けんとすれば父の入道ア、暫く■大事は油断より起るぞかし。宮をかまくまへ奉り。夜中に

門を開かん事不覺の至り。これ／＼芭蕉仔細あつて夜中に門を開く事は叶はず。今宵はそれにて明かせ明けなば内へ入れんとあれば。地こは心得ぬ仰かないかなる憎しみ候ぞ。是非明けてたべ明け給へと。スエテか

き口説きてぞ歎きける。詞いや／＼憎しみはなけれども。今宵門を開きては親兄が侍立たず。仔細は明朝語るべしは夜明け迄程もなし。地是を片敷き明かせとて内より小袖を投出せば。芭蕉は力なく／＼もオツリ衣引きへかづき。フシ臥し居たり。地清貫芭蕉と聞かからに。詞彼奴こそ彼の丑の時参りござんなれ。地大内の有様尋ねんとフシそろり／＼と側に寄り。作り聲して詞申しといへばア、怖と言ひ逃げんとす。ア、／＼これ／＼苦しからず。我は田舎の旅人なるが雨を凌ぎて罷り在る。承れば大内方の人様とや。拙者どもは田夫野人の遠國者。殿上の交夢に見た事も候はず。國許の土産に語り聞かせ給へとある。芭蕉

打笑ひ。田舎のお茶はいづれも左様に直へどもさして變りし事もなし。地蟬竹詩文和歌の道。取り分け流行るは濡事とフシに付こと會釋し申しける。清貫とほけた顔付にて。詞エ、野でも山でもすたらぬは戀の道。定めし上臈様もさうした色候はん。地さあ

／＼聞き度し／＼と言へば。一樹の宿も他生の縁と。フシ包ます語るうたてさよ。地恥かしながら自らは。詞禁中一の美男蟬丸様に思ひをかけ。地様々心つくし舟引手数多の殿なれど。さの一夜の玉霰まろび寝んと約束を。よしなき女に支へられ遂に思ひの晴間なき。スエテ涙の雨に身は朽つる。地念力岩を通すとの醫に偽なきならば。死ぬるとも生きるとも此の無念は晴らすべし。エ、面伏せ口惜しや。詞や。よしなの問はず語りあながしこ。地人に洩らし給ひそとスエテ又むせ返りせきあけしフシ袖は。時雨に争へり。詞清貫とつくと聞くからに。恐ろしの一念。遂に蟬丸直姫の仇とならん

は必定。如何なる事をかし出しし御命にさはりあらば後悔にかひあらじと。地近頃不便千萬ながら太刀抜きききそめ取つて引寄せ。胸元を刺通すなう悲し人殺しと。呼ばはる

聲に親子の者門を開き飛び出づる。惡しかりなんと清貫は篠の小藪に駆け入り暫く濟みおはしける。地母は縋りて悲めば人道親子も敗亡し。盗人の業なんめり追つかけんとはしたりしが。官の御事氣遣はしく立ちもやらず居もやらず。蟬丸も直姫もスエテ周章。ふためき給ひける。今を限りの芭蕉の前宮をつく／＼見参らせ。苦しげなる息を吐ぎム、それなるは蟬丸様直姫御前とは御身の事か。恨めしや恥かしや。偽多き御一言。誠と思ひ身を焦し戀に心を惱まして。あられぬ思ひに狂ひしも。只一筋に思ふ故君が戀路の障ならば。思ひ切れとは宣はで誑り殺さん御巧か餘りにむごき御心情の道はさはなきもの。なう憎うて人には。ッシ惚れぬぞや。はかなの戀に朽ち果てん名

こそ惜しけれ去り乍ら。我が里にお宿を
召すも他生の縁。地草の蔭にて君が爲悪し
かれとは祈らまじ。詞の所縁と思しなば餘
の人千度百度より。君が一度の手向草。露
の命は惜しからず。因なう父上様兄上様。
宮の御事偏に頼み奉る。地名殘惜しの母上
様南無阿彌陀佛といふ聲も。眠れる花の夕
の秋十七歳を一期として。遂に果敢なくな
りにける親子は夢とも辨へずステ縋り付い
て泣きければ。蟬丸直姫聲をあけさりとて
は覺なし。恨を晴れよ許してくれよ。不便
の者の心やと抱き付き縋り伏し。泣けど叫
べどかひぞなき。物の。あはれの限りな
り。清貫案に相違して今は耐へ兼ね案内
し。斯様々といひければ聞及びし清貫殿
か。先づ此方へと請じける。清貫人々に
對面し。かひがひしくも御隠匿我が身に取
つて祝着と禮儀こまやかに相連べ。先づ以
て御息女不慮の最期御愁傷察したり。さり
乍ら此の敵は知れ申す。本望遂けさせ申さ

んとあれば忠光悦び。それは何處いかなる
者にて候ぞ。ヲ、此の清貫こそ敵なれ。入
道親子仰天し一圓に心得ず。いかさま仔
細候はん承らんと眉を蹙めて申しける。
清貫涙をはらくとこほし。地ありし段々
心底を詳しく語り。宮此の所にましますと
は存ぜず。御行末の仇と思ひ不便ながらも
討つたりし。忠は却つて不忠となれり仇は
情となりたりし。短慮といひ粗忽といひ面
目も候はず。今は恨を晴れ給へと太刀を逆
手にすばと抜き。既に自害と見えける時
親子左右に取付き。なう清貫殿我々も侍な
り。一家命を擲つ上はさもしく悔み残るべ
きか。大事を抱へてこれしきに死なんとは
狼狽へしか。但しは狂氣かさあ死なれう
ば死んで見よと。ステ様々宥め止むれば。
地思ひ切つたる清貫も理に詰められて死な
れもせず。生きても居られず殺しもならず。
三人目と目を見合せてステ涙を流すぞ道理
なる。地はや東明に及びし時右大辨早廣青

侍輩に物具させ。直姫の老母同じく若君
奪ひ取り。陣頭に引つ立てて千手が屋敷を取
圍み。御勘當の蟬丸を隠匿へし段逆鱗料な
らず。太平の君が代に事を好むは痴者なり。
疾々蟬丸直姫を渡せ。異議に及ばば先づ一
番に彼奴等を殺すと刃を胸に差當て。サア
返事は如何にと聲々に喚き叫んで呼ばはり
ける。忠光親子清貫も。人質にあぐみ果
て左右なく切つても出で難く。如何はせん
と舞きて兎角時刻延び行けば。地エ、また
るし戦神の手向草。それ突き殺して切り入
れと。痛はしや御老母二歳の若君諸共に。
只一太刀に害せしは。目も當てられぬ次
第なり。エ、天道知らずの人畜め。一人も
廻さじと枕長刀おつ取りのべ。四十餘人を
弓手に受け馬手に支へて。三重へ戦ひけり。
地千手太郎が手にかけて十六人留めければ。
入道が長刀に八人かけてぞ捨てける。殘
る者も深手を負ひさつと引いては又駆け入
り。二三度四五度揉み立てしに千手親子聲

をかけ。清貫はおはせぬか宮を御供申されよ。跡を構ふなくと呼ばはれば。尤と清貫宮を負ひ参らせ己が館に落ちらる。地其の際に早廣後の垣を押破り。直姫を引つ立て大地に踏み付け拜み討に振上ぐる。

南無三寶と入道横合に丁ど受け火を散ら

して切り結ぶ。太郎は父を討たせじと打つてかゝれば入道隔て。父が命を庇ふな姫君を討たせなば。七生迄の勘當といふ聲に力なく。地母と姫とを兩脇にかい込もうで。上の山へと落ち行きける。入道は面もふらず追ひ行く敵を防ぎしが。早廣いらつて打つ太刀に弓手の肩先打込まれ。七十一歳春の夜のフシ敢なき夢とぞ消えにける。忠光父は如何ぞと取つて返してハア。口惜しや討たせつる目前親の敵ぞと。退く敵をかさに乗り蜘蛛手に追つ立て追つ返し。半時ばかり驅けたりしが早廣は行方なし。エ、無念口惜しし己れ天地を出でずんば。討つて父に手向けんと。僅かに残る雜人ども木の葉の

嵐磯打つ波。むらくばつと追ひ散らし。父が死骸の薄煙霞の谷へと分け入りし。父父たれば子も子たり。あつばれゆゝし頼もし。前代未聞の勇士やと撰文にも。残し止めつる。

第三

早廣が悪逆ゆる官は虎口の御命免かれ清貫が計らひにて中納言希世の館におはせしが。或時清貫希世参内あり。御扱も蟬丸の宮往んじ皁月の頃より御眼病例ならず。唐の日本の樂をもつて醫療手を盡し候へども。元來宮の御事は美事めでたくまします故。數々の女の思ひ嫉妬の怨御身に迫り。醫術の及ぶ所ならず遂に御兩眼盲ひさせ給ひ。蒼天に月日の光なく暗夜に燈火影暗へ奏せらる。天皇はつと御氣色變り御落涙まませしが。誠に朕が第四の宮と生れ。十善の位をもしるべき身が。生れもつかぬ盲目と成りし事。よつく前世の惡業深き故。

五體不具にして佛には成り難し。況んや此の世さへ暗きに迷ふ盲目の。地未來の間もいたはしやとステテ稍御涙にくれ給ふ。よし。此の世にて諸人の恥を懺悔して。業障を果し後世を助くる營み。逢坂山に捨て置くべしと。フシ繪言。あるこそ哀なれ。

地兩卿詞を揃へ宣旨にては候へども。賤山がつかへ不具なる子はいとほしじ。況んや一天の若宮を山野に捨てさせ給はん事。且は仁心薄きに似たりと恐れ入つて申さるれば。いやとよ生きとし生ける者子を憐まぬはなきものを。況てや我が親心身にむかへまく思へども。過去遠々の惡業は十善の王位も廻れずと。萬民に知らしめて天下の民を悉く佛の道に入れんこと廣大の慈悲ならずや。地子のいとほしきは盡きせねど國を育む我なれば。國民に換へ難し構へて汝等露程もいたはらば。却つて仇となるべきどとくく山に捨て置くべし。果敢な浮世やあさましの人界やと。御冠の巾子を傾

けて。御涙せきあへさせ給はねば。八省百官諸共に、フシおのく。袖をぞ絞らるる。地清貴希世兩卿も。力なくく退出ある世のなら。はしど三重へ定めなき。

蟬丸道行

フシ 結ぶの神も。偽りや。いつの月日に結びそめ。寝そめし夜半の夢消えて。スエテ縁さへ薄き唐衣。御痛はしや蟬丸は。何の報いか浮世の間。懸慕の闇のくらがり。引き出す牛は昨日かも。御幸の車、フシ引替へて。ハルフシ野飼にやつす。綱手繩。御身に添ふる物とては。立上の琵琶一面。清貴希世御供にて。フシオクリしをれ。出でさせ給ひけるフシ御有様こそ。哀なれ小オトリ秋ざれば。く月の。障りと泣き。歎きつる。東の山を越え行けど。今盲目の御身には。何の光も水鳥の。フシ加茂の川岸波越えて。契りも末の松坂とオトリ消えばや。海邊爰に。粟田口。ハルフシ秋まだ若き。山々に。忍びくくの初紅葉。誰に着よとか錦織るらん。

フシをりくくに。花鳥風月の戯も。共に散り行く相ノ山花の山鐘こ。くくとナホスラシほの聞え。御心細き時しもあれオトリおのが。夕の床急ぐつまこひ鴉二つ三つ。なう四つ五つ五文字は歌の。ハルハルフシ中山清閑寺。あの神垣の年古りし。天の帝の御廟野よ。長嶋弓手の山の岡のべと御手を取りて教ゆれば。本実官は兎角の言もなく世々の日繼の。天津君民を。ソレテ恵みの言の葉の。露の流れを汲みながら。キンオタリなり行く。果のあさましやと。御涙せきあへさせ給はねば。清貴希世心なきスエテ牛も。尾を伏せ角を伏せ。フシ涙を。流す有様に。草木も哀催せり。秋の田の。刈穂の藁屋風落ちて。賤が手枕寝亂れし。髪干す布干すまだ。フシ稻も刈り干す。我は袂の乾く間も。歌泣いそな泣いそ。澤邊の蛙。小オトリかゝる。思ひはよも知らじ紫竹交りの簾の下。春の所縁の東風菜。スエテ小笹姫笹行く袖に。歌藪着て通へ。笠着て又通へ涙の。しづく。雨まさ

り。言野雨には。あらでやこれの。木々の。木々の木の葉が。はらり。ほろり。フシはらくくくと。スエテ風に諸羽の官所。今日を限りと伏し拜み。上り下りの旅人も。小オトリ心。心に。今宵もたがたれと。伏見の山。見えて彼のたそ。神果がれの。さゝめごとハツミ今日に浮ぶ。種ぞかし。フシ急くとすれど。とげしなき牛の玉銜遅くとも。長嶋心の駒は日に千度懸しき。方に走井の。水橋の歯もよしやよし。いつを頼みに束つけん。スエテ我が黒髪のさねかづら。フシ逢坂。山にぞ着き給ふ。ワキ地へ清貴希世兩卿は官を木蔭に下し参らせ。宜旨黙し難く是迄伏奉せしめ候へども。スエテいづくに捨て置き申すべき。聞さるにても我が君は堯舜以来の賢王とは申せども。地現在御子を捨て給ふ御慮如何なる事やらんと。スエテ涙にくれて申しけり。本実官へ蟬丸閉召しあら愚かや人々よ前世の飛行拙くて盲目となりし故。聞されば父帝の御情

なきには似たれども。此の世にて因果を果
し後世を助けん御はかりごと。地是こそは
親の慈悲捨て置き歸れと宣へば、
二人はいよ／＼涙を流し、此の御有様
にては盗人の虜あり。御衣を賜つて蓑を參
らせ候はん、是は雨による田蓑の
島と詠せし蓑か。さん候雨露の爲な
れば同じく笠をも參らする、是は御侍
み笠と詠みし物よなう、又此の杖は御
道しるべ、是もつくからに千
歳の坂も越えなんと。彼の遍照が詠みし杖
か、それは千歳のさか行く杖、
は所も逢坂山、關の薬屋の竹柱、
かゝる憂き世に。逢坂の。知るも知
らぬも是見よ。延喜の皇子の成り行く果、
こはそも如何なる例ぞと。ステ聲をあけて
ぞ泣き給ふ。宣言なれば人々も。名
残の袂振切つて涙ながらに歸らる。本夫
皇子は跡に只一人。琵琶を抱きて竹の杖、
伏し轉びく／＼さらば、さらば、

さらばの聲ばかり梢の木魂山彦を。せめて
それかと力草分けて。山路に三重入り
給ふ、柱はみもの。三五の暮名高き月
にあふ坂の。關の清水と聞えしは江州一の
名水なり。されば關寺の稚兒達も。是を佛
の闕伽桶や柄杓の露の玉。月を汲まんと
秋に澄む、清水が許に出でらる。時
に柳の木隠れより若き女の走り出で。石を
袂に拾ひ入れ南無阿彌陀佛と言ひ捨て。既
に清水に飛び入る所を稚兒達引留め。
生第一の靈水にて捨身思ひも寄らずとあれ
ば。地いやととも存らへ果てぬ身ぞ。御慈
悲に見遁して死なせてたべと振放すこれ／＼
。程思ひつめしには仔細こそあらめ。
品によつて兎も角も先づ靜まりて語られよ
ひらに／＼と申さる。彼の女顔打赤め
恥かしながら自らは。此の山に捨てられお
はします蟬丸様の思ひもの。直姫と申す者
なるが御行方のなつかしく。是迄さまよひ
候へども御在所も定かならず。人に尋ねて

候へば御身の不具を恥ぢらひて。人に面を
會せじと山深く入り給ひ。今は生死も知ら
ざると聞くより浮世の頼みも切れ。此の清
水をば三つ瀬川あふ瀬を急ぎ候ぞや。はや
／＼死なせたべかしとステ又さめ。さめと
ぞ泣き居たる。稚兒達聞き給ひ扱いたは
しや。我々は此の關寺の稚兒なるが。山踏
みの行法に御在所は存じたり。餘所ながら
見せ申さんさり乍ら。人音すれば逃げ隠れ
給ふ間必ず聲ばし立て給ふな。地只御姿を
見る迄ならばいで／＼案内申さんと。夕の
雨にさす傘や。空も涙も定めなき山路、
なるらん。第一第二の紘は素
々として。秋の風松を拂つて疎韻落つ。第
三第四の宮は。我蟬丸が調も四つの。折か
らなりける村雨かな。下歌流るゝ水のあはれ
世の。其のことわりも。ナホスフシ目に見えぬ。
地月の入るさも知らざれば。夜盡分かん方
もなくステ谷の。閑古鳥。梢を渡る。願
やオクッ何を。うらみて。猿啼く。江戸地落

葉衣に露重く。フシ月を擔ふに肩瘦せたり。
移れば變るあはれさよさればにや。夕日の
廻る方をこそ都の空と招く手にスエテそなた
の嵐懐しく。地又しんくたる。野分に琵琶
を弾じては。過ぎし寢覺の忘れず。鹿
の妻戀ふ聲迄も。御身の上と。フシあぢきな
し。地真拆の葛青つづら。來る人ありとも
知り給はず。槓や柏を押し分けて。アミド杖
が。枝折の。組傳ひ。フシよろほひ。辿
らに契りし人かあさましやと。繩り寄ら
んとせし所を。ツレ。稚兒達抑へてア、音
高し。人音すれば逃げ隠れ給ふ故物言ふ事
は叶はずとこそ最前より申しつれ。地只
音せでとありければ。太夫。姫は詮方涙に
くもる鏡の影か我が戀は二人。逢ふとはす
れど物言はぬ。太夫。我が口なしの色香をも
二人。見ずや太夫。知らずや。三人。あさまし
やと聲をも立てず忍び音に。スエテ咽せ返り
てぞ泣き給ふ。太夫。フシ。宮は斯くとも白絲の

千葉琵琶取出し。盤渉を平調に調べ變へや
よや待て。天津雁がね。言傳てん。故郷の
秋は。如何ならん我は。深山に住み侘びて
琵琶より外は。フシ友なしと。地撥を上げ
給ひし時。風がもて來る村雨の紅葉遅しと
夕時雨。地一村さつと降り來れば蟬丸琵琶
を誦さじと此處の木の下彼處の木蔭。濡れ
ても寢んと詠ぜしは。花に戯れし歌のさま
我は又。三人賤の男が。く。かづく袖笠
腕笠の。雨に木の葉も亂る、初時雨彼方へ
走り。此方へ走りざらりくざらりくざつ
と。驅りさまよひ身は濡衣木蔭なければ雨
もたまらず。太夫。人々見る目も痛はしく少
し小高き岨蔭より。笠をそつと差しかくれ
ば。太夫。宮御耳を敬て。詞不思議や雨
は降り乍ら身にかゝらぬは木蔭よな。口
惜しや古へは。一夜泊りし宿迄も。錦の褥。
綾の床。垣に金花をかけ。戸には水晶つ
らねつ。鸞輿屬車の玉衣のナホス。隙間の風
も厭ひしに斯く。あさましき言。フシ敷く

ともしかじ。世の中よ。思ふ人とし片敷か
ば。スエテ玉の臺も思しき。地斯くとは知ら
で直姫があはれ何とか暮らすらん。戀しの
昔や忍ばしの直姫やと。盲目の悲しさは側
に在りとも知り給はず。獨ごちたき聲を上
け歎き暮はせ給ふにぞ。太夫。今は堪へ兼ね
心消え直姫爰にと言はんとすれど。ツレ
稚兒達誓しと止むれば。二人。絶え入り消え
入り伏し轉び身を悶えてぞ慥る。フシ神な
ら。ぬ身は是非もなし。太夫。や、あつて
蟬丸琵琶も撥もからりと捨て。南無三寶
叶はぬ事に迷うたり。逢ふは別れの始め一
人止まる道ならず。色も匂ひも一盛り。ア
、思ふまじ歎かじと。一首の歌にかくばか
りこれやこの。行くも歸るも別れては。知
るも知らぬも逢坂の關。朝に別れ夕暮に。
あふ坂山の旅人の。フシ。往き來も夢のすさみ
ぞや。雨降らば降り。風吹かば吹け。山の
奥こそ住みよけれ。エ、浮世の無常今ぞ悟
の花開けしと。走り出でんとし給へば。ッ

キ人々崖より飛んで下りこれ直姫よとす
がりつく 木夫 宮もこれはとばかりにて三
人 互に手を取り袖を取り戀しゆかしの物
語。盡きせぬものは涙なりフシ心ぞ思ひや
られたる リキ 時に二人の稚兒達詞を揃
へ如何に蟬丸。御身色を重んじて思ひに絆
され情に沈み。數多の女を迷はせし。因果
の體心をくらし盲目となり給へども。地
今の悟の詠歌面白し 三人 三十一文字
の面に旅の姿を列ね。内には則ちコハリ會者
定離愛別離苦の理。逢ふは別れの始めと
示し二首に三世を顯せりワキ 神も心をた
をやぎて ツレ 佛の教にあふ坂の。二人フシ
あの關寺の鐘の聲。煩惱の夢を覺すや法
の聲も靜かに先づ初夜の鐘を撞く時は 木夫
諸行無常とフシ響くなり三人 後夜の鐘
を撞く時は 木夫 是生滅法と響くなり二人
晨朝の響は 木夫 生滅滅已フシ入相は
三人 寂滅爲樂と。響きて菩提の道も暗か
らず。悟の夜半も明け渡るコハリ兩眼は暗く

とも。汝心月明かなり和歌の妙を授けんた
め ワキ 我は人丸 木夫 我は赤人 三人 二
人の魂魄現れ出で。共に成佛得脱の兜率に
生れん嬉しきと。いふ聲ばかりは逢坂山。
いふかと思へば逢坂山のナホス杉の嵐に立
ち。紛れてぞフシ失せにけり 木夫 蟬丸あ
つと感歎ありそれ日の本は神國の。和歌を
以て道とせり歌仙の靈魂現れ出で。詞を交
す其の奇特未だ天道捨て給はずと。感涙袖
をうるほして扱直姫に逢ふ事も。神の授く
る縁ぞと 三人 各夢かと迎られて。猶信
心の和歌の道古き例に踏み分けて。打連れ
山路に歸らる。夫婦不思議の契とて。再
び巡りあふ坂山の名歌は。今に残りける。

第四

地 右大辨早廣は千手入道を討滅し。都の住
居も成り難く遠國に彷徨ひしが。兔角我
が眞正の敵は蟬丸なり。是非に恨を晴らさ
んと下人等一兩輩召連れ。地 逢坂山の谷峯
を草を分けて尋ぬれども。宮の行方はなか
りけり フシ 後は小關藤の尾や。地 かくる山
家も住めば住む奥の柴人友呼びかはし。詞
これく逢坂山にて不思議の物を拾うたり。
そも何といふ物ぞ。さあ推當に言うて見よ。
と琵琶の撥をぞ出しける。樵夫ども集り
て。姿は銀杏の葉の形にて扱も合點行かぬ
物。是は猿の末廣か。地 いやく天狗の笄
ならめとフシ様々見立て笑ひける。詞 時に向
ふの岡邊より若き樵夫の是を見て。地 やれ
方々それは此の山に捨てられまじませし。
蟬丸様の琵琶の撥といふ物ぞ。賤しき者の
用には立たず我にくれよといひければ。ム
ムして又お事は何にかする。様子によつて
遣らんといふ彼の男聞きも敢ず。チ、某は
あの志賀の里に世を遁れ住み給ふ。博雅の
三位と申す人の一僕喜藤太といふ柴刈なる
が。主君博雅の三位殿は蟬丸様の琵琶の弟
子。其の由緒にて此の間。蟬丸様御夫婦共
に旦那が庵に入り給へば。捧け申すに是非
々々所望といひければ。地 扱はさうか持つ

ても用なし勿體なしと。フシ與へて皆々通り
けり。地早廣とつくと聞きすまし郎黨に胸
せ。喜藤太を四方よりはらくと取圍み。
地これく汝が主人三位の庵に蟬丸のおは
するとや。さあ案内して連れ行け。否と言
は、踏み殺さんとかさをかけてぞ申しける。
喜藤太ぎよつとせしが打領き。ム、聞えた
うぬめ等は強盜よな。ヤイサ己れ等。氣色
すればとて主の家へ盗人の引入れがなるも
のか。下郎と思ひ悔るな四も五もくふ男で
なし。足手息災なうちはやく歸れと怒り
ける。早廣怒つてそれ引立てよ案内させよ。
地承ると下人ども。飛びかゝれば取つて投
け。取付けば踏倒し杖取りのべ打つてかゝ
る。早廣も抜き合せ二打ち三打ち働きしが。
山路に馴れたる荒男岩とも谷ともいはせば
こそ。猿より軽く駆け廻れば。さしもの早
廣詮方なくフシ轉びころんで逃げ落ちける。
地喜藤太も是迄と元の所に立歸り。同王な
んでもない奴等に逢ひあつたら汗を流せし

と。地柴に棒差しかき擔ひ。鼻歌うたひ悠
々と志賀の。里へと三重へ歸りける。地左
衛門督清貫は。宣旨とは言ひながら御幼少
より仕へにし。宮を山野に捨て參らせあぢ
き無き世に叢染の。袂にやつし國々を修行
念佛他事もなし。されば故郷忘じ難し宮の
御上如何ぞと。都に歸る漣や。フシ志賀の
浦にぞ着き給ふ。古き都の所から花散る里
の藁圍ひ。檜垣透垣さゝやかにいとゆるづ
ける庵あり。立入り見れども主はなしスエテ
持佛の香華こまやかに。持經禮讚繕はずフシ
昔覺えたり。本尊も。如何なる過世者の
住家ぞや。地世を厭ふ身は誰とても斯くこ
そあらまほしけれ。住持の歸さを待ちうけ。
一夜語りて通らばやと思ひ椽に腰かけ待
居たり。時に佛壇の下より。女の聲にて申
しくと呼びかくる。はつと驚き見てあれ
ば。地忍びやかに戸を明けて雪のやうなる
手を出し。地やよこれ水一つたべといふ。
地大道心の清貫も是ぞ化生の業ならめと

シ膝わなくと顛ひしが。同エ、不便や俄
鬼道に迷ひし幽靈ごさめり。是ぞ出家の
役と観じ。地器物に水を入れ。同求給三途
飢渴飽滿地南無阿彌陀佛と差出し。フレちや
くと手を引きさりしが。地又こはくと
立寄りてそつと覗けば。同司矢八幡あてや
かなる女房なり。ム、扱は御坊の梵妻よな。
いやはや浮世に抜目はなし。誰かは知らね
ど此の庵の濡坊主。地所こそあれ佛壇に女
寝させてさゝめごと。思ひまはせば可笑く
てフシ獨り笑うて居たりしが。又聲立てて
あら心よや。今一つと差出す清貫もおどけ
者。同腸持の大黒殿ちと拜み奉らんと。其
の手を取つて引出しよく見れば直姫な
り。地扱は御身は清貫かなう姫君かと手を
打つてフシ互に。呆れおはします。同され
ども清貫不審晴れず。何とて爰には御入り
と問へば直姫聞き給ひ。さればとよ此の所
は博雅の三位とて宮御琵琶の弟子なる故。
扱妾もろとも是に忍びましますと語り給へ

ば。清貫悦び宮はいづくに渡らせ給ふ御目見え致したし。ヲ、御出世の御祈請に坂本の山王へ日参遊ばし。地今日も三位を御供にて御参詣候が。追つ付け歸らせ給ふべしと宣ふ所へ喜藤太立歸り。清貫をきつと見て。彼奴も盗人の同類か油断はせぬと鎌取直すを。姫君御覽じやれ喜藤太。あれは宮の御乳人清貫といふ人なり。お事は氣はし違ひたるかと宣へば。ム、扱はさうか御免々々。拙者は山にて強盜に逢ひし故。扱只今の仕合と有りし次第を語りける。清貫つくづく聞き給ひ。いやくは是は盗人ならじ早廣に疑ひなし。大勢催し此の所へ押掛けんは必定。垣一重の庵室に長袖弱筋過ちあらば後悔せん。地いで山王迄姫君をも御供し宮をも誘ひ奉り一先づ都へ上るべし。それ喜藤太御手を引け暮れぬ先にと夕浪の湖邊を濱傳ひに坂本さしてぞ三重へ急ぎける。フシ爰に又。地千手太郎忠光は父入道を早廣に討たせ。其の無念晴れやらす老

いたる母を肩にかけ。親の敵早廣を是非一太刀と心掛け。野山に起き臥しつけ狙ふ所存のオクッレ程こそフシ理なれ。時しもあれ志賀の里にて。早廣をつけ出し。今ぞ日頃の運試し天の與へあら嬉しやとはやれども。見れば敵は大勢にて群り来る。老母を何處に置くべきぞ。エ、屈竟の庵室御免といひ捨てつと入り。持佛の下端の戸を押開け母を忍ばせ奉り。地あら心安や此の上は腕限り太刀限りと。身繕ひする所へ早廣主従七人にて。博雅の三位が庵とは是ならぬ。ほつ込んで討取れといふ程こそあれ。我先にと亂れ入る忠光戸口に立塞がり。千手太郎見忘れたか己れをこそ尋ねしに。神佛のあてがひ能くも爰へ來りしな。親の敵覺えたかと無二無三に切つてか、れば。先を取られて動顛し憎えてさつと退きしが。踏み止れば打ちかけ取つて返せば切りかけ。打ちかけく息をもつがず。逃ぐる敵に追つすがい栗津が原へぞ三重へ追

つかけけるフシ斯くとは知らず。博雅の三位蟬丸の御供して。清貫とは道違ひ麓の田面下向道フシ己が庵に歸りける。地蟬丸仰せけるは誠に師弟の因とて。此の度の忠節淺からずと宣ふにぞ。かゝる御用に立つ事も生前の本望。地先づは姫君さぞ御淋しく御心も盡きぬべしと。佛壇の戸を明け御手を取つて引出せばヤア。是なんぢや。地七十有餘の老女頭の雪もみつわぐむ。老いさらほひて出でてける三位はつと飛び退けば。宮も驚きやれ何事ぞ氣遣はし。地さん候姫君俄に白髪の姥と成り給ふ。今の間に年の寄るは合點參らず。これ御覽せと御手を取り肌を撫つれば。地骨荒れて老の波立つ身の皺にフシ瘦せて色香もなかりけり。地宮も呆れてましませば。三位いよく當惑し。今朝程宿を出でさまに確か姫君を入れ置いたと存するが。地取り違へたか知らぬ迄とフシ眉を。ひそめて居たりけり。地いたはしや蟬丸は御涙をはらくと流し。我此の姿

となる事もあの極ゆると樂しみに。情も戀も覺め果てし天魔の所爲か冥罰かと。エテ御愁歎こそ道理なれ。地老母は聲を聞き覺え御顔容をも思ひつけ。なう宮様か蟬丸様がお懐しやゆかしやと。縋り付けばアアうるさ。許せ〜と彼方へ逃げ此方へ隠れ百歳に。一歳足らぬ九九九髪。フシもてあつかはせ給ひけり。御ヲ、御尤〜。名を申さずば御見忘れ候べし。地妾こそ君がため早廣に討れし。千手入道が後家忠光が母にて候と。件の概略語らるればに〜それよ珍しや。これは〜と手を打つて。フシ一先づ不審は晴れしかど。地直姫の行方なし最前の騷動に。敵や奪ひ取りつると未だ氣遣ひ絶えぬ所に。清貫喜藤太姫君を誘引し。宮に出遇ひ奉らぬは道こそ違ひつらめとて。地本の庵へ歸らるればこは清貫か我が君か。それよこれよと寄り集まり泣いつ笑うつとりどりに。フシ語らひどよみ給ひけり。地然つし所へ千手太郎御傷少々受けながら。大

汗になつて馳せ歸り。四人々を見るよりもはつと驚き嬉しさに。地とかうの言句も出でばこそ夢かと思ふ氣色なり。各一度にやれ千手が忠光か。御事の首尾は御老母の物語にて承る。して先づ敵は討留めしか。さん候敵は大勢と申し。長追ひに力盡き候を火水の底もと存せしかど。母が有様氣遣はしく無念ながらも討洩らし取つて返し候。幸ひかな此の上は。恐れ乍ら母を君に預け參らせ。心身軽くし罷り出で敵を討つて歸るへし。はや御暇とぞ申しける清貫聞きも敢ず。ヲ、清し勇ましし。御老母は我々預り。都一條大宮に逆髪の姫宮とて。蟬丸の御姉宮おはします。君諸共に此の方へ伴ひ忍ばせ奉らん。これ此の袈裟衣は某が着用して君に巡り逢ひ奉りし吉相目出度き三衣なり。地貴殿に譲り申すべし修行者に様を變へ。狙ひ寄つて本望遂げ目出度く歸洛せられよと。おの〜門出祝はるればヲ、有難し忝し。此の衣を賜つて姿は墨にやつ

すとも。心ばかりは染め残し彌陀の利劍を提けて。假令ば敵翼を生じ。槍を翔り波を潜つて新羅百濟高麗國。支那天竺に到るとも乾坤を出でずんば。よしや五年が十年も命終らば一念の。魂残つて本望遂げ目出度く歸つて母ぢや人。御笑顔見申さんヲ、御身が笑ひも見せてたべ。お暇申す我が君様暇申して母上様。各には老母が事頼み存するヲ、〜〜おさらば。さらばと出でて行く花は三吉野人は武士譽は。雲井に薰りける。

第五

地世の中は兎にもかくにも假の宿。傘一本に起き臥すも身の程かくす我が庵と。墨の袂に墨頭巾經論少々懐中し。父の敵を狙ひ行く瞋恚に我は迷へども。人を導く六道の。エテ。辻談議こそ殊勝なれ。誠にあさましいかな歎かしいかな。今日の衆生一生造惡不斷煩惱の塵に交り。朝に怒り夕に悦び。貪瞋痴慢の色香に迷ひ假にも佛法といふ事を

知らぬ。愚なるかな。妻子珍寶及王位。臨

命終時不隨者と申して。現世にて寶の山を

築かせ。子孫奴にかしづかれ花に詠じ月に

嘯き。無上の榮華を極むると雖も。一息切

斷臨終の嵐に貪慾私慾の火の車。業障の雲

に轟き誘ひ行く時んば。日頃の下人も從は

ず金銀衣服も身に着けず。無間奈洛に眞逆

様に落つる事三つ羽の征矢よりいと早し。

財寶は地獄の家也名聞は焦熱のつま木とも

譬へたり。さて如何がして各我等。佛には

なるぞと申せば。ハヤ有難い事の。化城

喻品に曰く。大通智勝佛十劫坐道場。佛法

不理前不得成佛道。此の文の心は一心の外

に佛法なし。一心の外に成佛なし。されば

愚痴無智の凡夫心の外に佛を求め穢土の外

に淨土を求め。却つて迷ひの種となす。是

を和らけ傳教ナホス大師の。フシ御歌に。悟

とて外に。求むるヲシ心こそ迷ひそめける。

目といひ眼といふが如くにて。一佛異名同

一體。心の外に來迎なし。罵ながら爰も連

華道場。寢ても佛覺めても佛。立つても佛

居ても佛。行住坐臥一心不亂に念佛せば。

己身の彌陀唯心の淨土なれば。心外無別法

即身成佛。取りも直さず居も直らず。十方

遍照の光明を放ち。金色の蓮臺に駕せられ

一瞬刹那が其の間に。忽ち安養無垢世界。

不退快樂の都に到らん何疑のあるべきと。

四頓八辯流るゝ如く。語り給へば往來は

シ皆々禮して通りけり。地右大辨早廣は丹

波の方へ落ち行かんと。編笠引つゝ驛馬

に乗り白川越に來りしが。圓傘にや恐れけ

ん早廣が乗つたる馬。俄にけしとみ跳ね上

り鞍を放れてどうど落つる。早廣怒つてこ

れ願人め。馬上にも容赦せず傘をひらめか

し。落馬させつる奇怪と笠取つたるを屹と

見て。ヤア親の敵早廣か千手太郎知つたら

寶と馬引寄せ打乗り。鞭を當てて歩まする

早怯者臆病者。返せく〜と聲をかけ。息をも

つがす追つかけしはフシ只章駄天の如くな

り。地半道ばかり追つかけしが馬の足並早

廣に。十四五丁下り松の木蔭につつ立ち。

又駈け出でんとしけれどもこは如何に足

立たず。地野山に臥したる千手太郎二三日

五穀を食せず。咽渴してよろ〜と一足も

引かればこそ。エ、冥加に盡きたり口惜し

ゝとエテ齒嚙みを。なしして立つたる所に。

圓誠に天の與へかや死人に供へし。枕つけ

の供物松の下に捨ててあり。有難し幸ひと

一口にぐつと食ひ。一ゆり搦つて力足を踏

んだれば。地金剛力士の如くなり。サア千

里萬里も一飛びと又駈け出し。三惠行く水

の。地神屋川にて程なく追つ付き聲をかけ。

圓馬の鞍鞍壺かけて突きければ。馬は堪へ

ずかつばと伏す早廣下り立ち心得たりと。

つと入り。取つて引伏せ馬乗りにとどろり乗
り。親の敵諸人の仇年來の恨み思ひ知れと。

三刀四刀刺通しエ、嬉しし心地よしと。エ
エ嬉し泣に泣き居たり。先づ母上に悦ば

せ奉らんと。首かき落し槍に貫き振りかた
け蟬丸のおはします一條大宮逆髪の館へ。

飛ぶが如くに急ぎける心の内こそ 三重
嬉しけれ 案内にも及ばず。千手太郎忠

光敵早廣が首取つて参りしと大音あけて呼
ばはれば。希世清貫宮御夫婦これはく

と走り出で。扱もお手柄々々とッ勇み悦
び給ひけり。此の年月の難行又下り松に

て餓に及びし時。亡者に供へし供物にて餓
を凌ぎし有様具に語り。母に申して喜ばせ

ん早々逢はせてたべと申せば。人々は涙ぐ
みステとかうの事も宣はず。こは心得ず

如何なる仔細ぞ聞かさせ給へ。希世涙を止
め今更語るも便なきながら。御老母の御事

は廿日程以前より風邪の心地と候ひしを。
醫療手を盡せしかひもなく。一昨日の暮

方に遂に果敢なく成り給ふ。只今の物語亡
者の供物を食せしとは。それこそ御老母の

供物よと語りもあへぬに忠光は。はつとば
かりに伏し轉びッ聲も。惜まず泣き居た

り。地心の内こそ無慚なれいと涙にくれ
ながら。扱は亡母の供物にて我が渴命をつ

なぎ本望を達せしかや。草の蔭迄子を思ふ
母の一念通じたる。親子の恒遇の有難さ

よ。斯くあるべきとは存せず御顔ばせを拜
せんと勇み歸りしかひもなき定め難なの世

の中やと。人目もわかず聲を上けステ口説
き立ててぞ泣き居たり。けに道理ことわり

やとッ各袖をぞ絞らるゝ。稍あつて千手
太郎ア、歎くまじや候。親兄弟が命を捨

てしも君を御代に立てんため。敵を討つて
候上は只父母が孝養には。君御出世の御訴

訟こそあらまほしう候と。涙を止め申しけ
れば。清貫聞きもあへず我々も然は存すれ

ども。先々月より直姫御懷妊の兆候ゆる。
取紛れ延引せし地いざ急に奏聞せんと評議

とりなる所へ姉官ゆるぎ出で給ひ。千
手太郎とは御身の事か忠義感じ入つてこそ

候へ。地妾は逆髪とて蟬丸の姉なるが。因
果の不具に髪逆に生えし故天帝にも嫌は

れて。かゝる佗しき住居ながら是は過去の
因果なれば斬るべき力なし。又蟬丸の盲

目は嫉妬に命を失ひし。北の方の一念現世
の報ばかりなり。殊に直姫懷妊とや。彼の

恨にて生まるゝ子も不具ならんは必定。も
と北の方に仇もなければ科もなし。地安居

院の小聖を請じ。宇治川にて七々日魂鎮め
の法事をなし。彼の亡魂を和めなば蟬丸の

目も開け。直姫の平産も氣質美麗の男子
ならんとくくと宣へば。皆尤と同じつゝ、

小聖に御使者あり。都の辰巳思ひ立つ日を
吉。日とぞ 三重開白ある。

懷胎十月の由來
フレ宇治の綱代木。日を重ね。今日滿願の
大法事。宮御夫婦は願主にてッ塚の左右

に着座ある。大君御幸なりければ。洛中近

國隠れなく。信心の參詣は。老若男女貴賤
都鄙 フシ袖を連ねて夥し。地かくて安居
院の小聖は役の行者の跡を繼ぎ。胎金兩部
の峯を分け。七峰の露を拂ひし篠懸に。不
淨を隔つる忍辱の袈裟。智行劣らぬ御弟子
達弓手馬手に相具し。壇上にさしかかり先
づ加持の讃をぞステ誦せられける。謹上。
ワキツレ再拜 シテ再拜 三人敬つて申す魂鎮め
それ無漏無上の法界には。自他の念更にな
し。悟る時んば十方空。迷ふが故に三界常
喜怒。みだりに起つて哀樂。之が爲に止む
事なし。花と見よ雲と見よ。立田の錦吉野
の雲 小オクリ現 なければ。フシ夢も結ばず。
水溜らねば月も宿らず。ハルフシ今願へす。
幣帛に。阿字本不生の風を招きて。迷妄の
闇を晴さん。 夫夫 抑行者が修法といつば。
初七日は曼陀羅供。 ワキニ七日は放生供。
ツレ三七日には三人龍女成 佛布施餓鬼。四
七日は光明供。 五七日はフシ妙なれや
法華讚法六七日は。法要の修理三昧今月今
日ナホス七々日の大結願と申すには。 夫夫 妊婦
安平子安の法。今の御法に仇を忘れて擁護
の毗を廻らし給へと。 懐胎十月の十相を
は一氣胎中に孕まれ。 其の形恰も鵝卵の如
し。これ本來一徳の清水。形に取つては混
沌未分。名に取つては大元大素神道にては。
國常立尊と申し奉り。 漢儒は天の生民を下
すといふ。佛法にては本有の毘盧遮那。不
動明王の請取り給ひて フシ本來の。 空の一
物是とかや。二月目には陰陽の。 二氣相和
して一氣となり。獨鈷の形とあらはる。是
を胎子と名付けて形の始めのつきにて。樂
師如來の請取りなり。 三月目に至ては人倫
の本心 私なく。始めて一念萌す天竺の釋
迦牟尼如來は佛といひ。 唐土の聖は明德と
名付け我が朝にては神慮と仰ぐ。 名付くる
所は隔れど三教一致は。 オドリフシやこのく
ハツアくこのく 三鈷の形文殊菩薩のフ
シ請取なり。 はや四月めは。 地水火風の五輪
悉く連りて。 仁義五常の五鈷の形普賢菩薩
の守なり。 扱五月に及んで。 六根手足を彩
色五體残らず連續す。 此の時より其の體に
守本尊定まりて。 小オクリ附添ひ。 めぐる腹
帯や ハルフシ地藏菩薩の。 請取なり。 六月に
なれば好む所。 欲する所自然に生じ。 母の
乳房に喰ひ付きて。 親の血を吸ひ取ること
フシ凡そ三石六斗なり。 即ち大悲觀世音。
是を守らせ給ふとぞ。 扱七月に至つては忝
くも御佛は三世の因縁壽命を鑿み。 扱こそ
人間一生にめぐる。 因果の小車の輪の。 輪
寶に刻み付け。 頭にかづけ給ふとかや。 彌
勒菩薩の請取なり。 八月目に及んては阿闍
菩薩の守にて。 輪寶變じて胞衣となり。 九
月には成長し意念ある故法界の。 惡魔惡
靈毒氣を吹き入れ。 吹きかけ。 吹き込み此
の界に出生せば。 己れが魔道へ引入れんと
隙間を狙ひ窺ふなり。 父母の所行所念にひ
かれ。 善をなせば善人。 惡をなせば惡人と
成り極樂地獄の境とて。 産神をナホス定め

置き勢至菩薩のフシ守なり。地十月は愛染明
王。されば六道四生廿五有の其の中に。人
よりも尊きはなく皆佛性を具へたり。彼も
我も一佛一體汝が怨念消除微塵。本の佛果
に至り給へ。唵阿毘羅吽見。吒干輪急々。
如律令と精々をぬきんでし。修多羅の聲も
川風も天に響きて、有難しフシ時に不思議
や。神木の松の木の間に北の方の幽靈影の
如くに現れ。此の御經に引かれて五逆の
達多八歳の龍女。共に佛果を受けしぞや恨
を晴れて今よりは。護持の佛となるべしと
宣ふ聲も香しく。如意観音と現れ光を。放
つて失せ給ふ。此の光明に照されて蟬
丸の御兩眼。くわつと開けてこれはく
と宣へば君臣上下押しなべて。喜びさゝめ
き給ひけり扱小聖に御禮あつく。御夫婦打
連れ還御ある御子孫繁昌國繁昌。千秋萬歳
萬々歳盡きせぬ。やどこそ久しけれ。

我等かたり本の通ちがひなく寫させ進せ候此外口傳とてさのみむつかしき事
もなく候たゞ人の心を慰るを秘傳にいたし候しかしふし付は作意と文句のは
だゑが大事にて候秘事はまつけとや かしこ

竹 本 義 太 夫

近 松 門 左 衛 門 作

大阪御堂筋 山 本 九 兵 衛 版

